

議 長 総 括

朝鮮戦争の再検討 - その遺産 -

加賀谷 貞司

先ずは、今回のテーマ「朝鮮戦争の再検討 - その遺産 -」の意義ではありますが、昨日の、次官あるいは防衛研究所長の挨拶でもありましたように、「現在の東アジアの戦略環境形成の原形」を形成した要因のひとつです。この「朝鮮戦争」を約60年経た今日、再検討することにより、これからの地域の戦略環境、あるいは安全保障政策等を考察するための、なにがしかの歴史的示唆を提供できるのではないかと考えております。

例えば、先週ワシントンで行われました、ブッシュ大統領とノ・ムヒョン大統領との米韓首脳会議におきまして、戦時作戦統制権のアメリカから韓国への変換が議論となりました。

韓国は、朝鮮戦争勃発直後に、軍の作戦統制権を国連軍司令官兼在韓米軍司令官に委ねました。その後、米韓相互防衛条約により、在韓米軍司令官がその権限を引き継ぎました。

キム・ヨンサム大統領の時に、韓国側の要求により、平時の作戦統制権が韓国側に返還されました。そして、現在「自主国防」を掲げるノ・ムヒョン大統領は、2012年に戦時の統制権を返還するよう提案し、アメリカ側は、その提案に応じたばかりか、時期をさらに繰り上げ2009年という回答を行いました。

一方、韓国国内では、野党ハンナラ党や軍のOBを中心として、「時期尚早」との反対の声が強く、激しい議論が展開されております。日本においても、こうした動きは注目を持って取り上げられ、戦時統制権に象徴される今後の米韓同盟関係の展開は、日本の安全保障にとっても、大きな影響を及ぼしかねないと指摘されています。朝鮮戦争は、一時期、“The forgotten war”(「忘れられた戦争」)と言われましたが、このように、今でも完全には「過去」になっておらず、現在の東アジアの安全保障と大きな関係を有しているのです。

次に、その研究の方法ですが、過去に生じた重大な出来事を分析・研究する手法として、次の3通りがあると思います

1つは、その重大な出来事をゴールとして、それに至る過程を重視して研究する。2つは、その出来事を中心にして、詳細に研究し、事実を明らかにする。その3は、その出来事をスタートとして、その後への影響を研究するものであります。

朝鮮戦争から半世紀以上が経過し、これまでも朝鮮戦争に関する多くの研究がなされ

てきましたが¹、こうした研究史を検討しますと、第1と第2の手法による研究が目立っております。

すなわち、「南侵か北侵か」といった開戦経緯・原因、あるいは「内戦か代理戦争か」といった戦争の性格論、そして、米中ソ三大国の介入・関与の過程というように、冷戦史研究の一環として、国際関係・政治外交史の分野に研究が集中してきました。

当初は、アメリカの政策決定・関与に関する研究が進展しましたが、特にベトナム戦争後は、アメリカの冷戦政策を批判的に分析する立場からの研究が目立ちました。その後、冷戦の終結を受けて、中国やロシアにおいて徐々に史料が公開され始め、スターリンや毛沢東など社会主義側国の動向も明らかにされつつあります。特に、近年、金日成、スターリン、毛沢東の三者の関係は、考えられていた以上に複雑で対立に満ちており、朝鮮戦争時に醸成された金日成の、アメリカはもちろん中ソ両国に対する不信任感が、その後の「チュチェ（主体）思想」に見られる独自の態勢を構築する契機となったとの指摘もあります²。

他方、朝鮮戦争は、勃発時点から、南北両者ともに相手側が攻撃を行ったと主張したため、朝鮮戦争研究は、当初から政治的なものとなりました。

すなわち、韓国は、金日成が中ソと共謀して南に侵攻したと主張し、北朝鮮は、アメリカの陰謀による攻撃であると反論してきました。

戦争をめぐる歴史認識は、戦争によって生まれた新たな体制の正当性とも密接に関係しており、特に、韓国、北朝鮮、そして中国といった、当時建国間もない国家にとっては、国家創設・政権樹立の正当性そのものとも不可分であるため、お互い妥協はあり得ず、議論はより「政治化」していきました³。

日本におきましても、朝鮮戦争の解釈は、55年体制の諸勢力、安保など戦後日本の体制の問題と深くリンクしておりました。特に、当時「全面講和」を主張した人々は、資本主義国＝戦争協力、社会主義国＝平和協力との見方に執着していたため、その後世界的には周知となった北朝鮮による「南侵」という事実も、日本では長い間否定されてきました。その意味におきまして、国際関係を踏まえつつ「北からに南に対して民族解放戦争として開始されたのが、まさに朝鮮戦争であった」との、本日「基調講演」をしていただいた神谷不二先生のご指摘は、画期的なものでした。

現在では、朝鮮半島をめぐる米ソ両国の勢力圏対立と、朝鮮における指導権をめぐる

¹ 最近でも、朝鮮戦争関連の本として、大沼久夫編『朝鮮戦争と日本人』新幹社、2006年、金学俊（Hosaka Yuji 訳）『朝鮮戦争 - 原因・過程・休戦・影響』論創社、2006年、金賛汀『在日義勇兵帰還せず - 朝鮮戦争秘話』岩波書店、2007年などが、刊行されている。

² 「金日成、スターリン、毛沢東の『相互不信』」『読売ウィークリー』2006年10月1日号、70 - 71頁。研究書としては、下斗米伸夫『モスクワと金日成 - 冷戦の中の北朝鮮 1945 - 1961年』岩波書店、2006年。

³ 近年中国では、「米の侵略」との解釈を修正しつつあるものの、党・軍の威信や中朝関係への配慮から、「北の侵攻」との見方を公然とは取れないと言われている（『読売新聞』2000年6月4日）。

国内権力闘争を背景として、武力統一を目指した金日成が、その程度・経緯についてはまだ議論はあるものの、中ソ両国の承認と援助を得て、最初に攻撃したというのが、平均的な見方となっています。

軍事史の分野では、歩兵戦を中心とする陸上戦闘やゲリラ戦争などについて研究がなされました。例えば、本日「特別講演」をしていただいた、ペク・ソンヨップ将軍が活躍された多富洞の戦いが代表的なものです。さらに近年、航空作戦についても研究が進捗しています。

他方、日本においては、国際政治史のほか、講和・日米安保条約の締結、「再軍備」、そして「特需」といった日本との関連についても研究がなされており、特に近年では、掃海艇の派遣をはじめとする日本の「貢献」の実態や、戦争原因の解明に焦点が当てられつつあります。

このように、これまでの研究の多くは、朝鮮戦争の原因と経過・展開の事実説明という、第1と第2の手法に立脚したものが主流でしたが、本フォーラムでは、その後への影響という第3の視点から朝鮮戦争を再検討いたします。

今回は「朝鮮戦争」という重大な事象をスタート台として、これが戦後の各国の政策や軍のあり様にどのような「遺産」あるいは「影響」を残したかについて、関係各国の研究者から発表いただくもので、6ヶ国の研究者が一堂に会するのは、画期的なことです。

オープニング・セッションにおいては、神谷先生とペク先生に、ご発表いただきました。

神谷先生から「朝鮮戦争と私 研究を回顧して」と題して、朝鮮戦争研究をめぐるご自身のご体験と、朝鮮戦争の開戦原因・性格についての現在のご見解をお話いただきました。特に、昭和41年に刊行された『朝鮮戦争』における先生の見解がなかなか認められなかったご苦労は、当時の日本の知的状況を如実に物語っており、興味深いものでした。

ペク先生から「私が経験した朝鮮戦争とその遺産」と題して、実際に経験された戦況における貴重な体験談と、その後の韓国軍に及ぼした影響についてお話をいただき、結論として韓米関係の重要性が極東地域の安定にとって重要であると強く主張されました。特に、写真を交えながらご説明された、同民族間で戦われた苛烈な戦闘の実相には、圧倒された次第です。

研究者と軍人という対照的な世界ではありますが、いずれもトップにおられた御両人のお話を通じて、改めて朝鮮戦争当時の日韓両国の相違を痛感いたしました。すなわち、韓国は烈しい陸上戦闘が繰り返された戦場であり、日本は社会主義の影響を強く受けた平和主義のムードが蔓延していたのであります。

第1セッションにおいては、「朝鮮戦争と東アジア」について韓国のペク先生、庄司先

生から報告がありました。

パク先生から「韓国戦争と朝鮮半島 社会・政治・イデオロギー的変革の視点から」と題して、朝鮮戦争が韓国社会に及ぼした影響について多角的な報告がなされました(著者の都合により、ペーパーは本報告書に掲載されておりません)。軍や警察主体の権威主義の強化という「警察国家化」といった「負の遺産」と同時に、伝統的階層社会の崩壊による社会の平等主義の促進、水平的・垂直的動員・移動による社会の再統合、さらに米国の経済支援などの、従来あまり触れられることのなかった朝鮮戦争の「正の遺産」についても指摘がありました。そして、両者が相俟って、逆説的ではありますが、社会の安定化と、それを基礎とした民主化と経済成長がもたらされたと結論付けられました。

庄司先生から「朝鮮戦争と日本 アイデンティティ、安全保障をめぐるジレンマ」と題して報告がありました。朝鮮戦争は、自由主義陣営への参入と日米安保体制により、近代以降のアイデンティティと安全保障をめぐるジレンマが解決されたと話されました。他方、「国際冷戦」というイデオロギー対立、ナショナリズムの分裂、そして安全保障に対する思考の欠如をもたらし、現在にまで影響を及ぼしていると指摘されました。

両報告を通して、日韓両国は、全く異なる方向ではありますが、朝鮮戦争により正負両面の影響を受け、特に、韓国は、危機意識を背景とした「国家」としての権威主義的統合、他方日本は、イデオロギーによる「国家」の分裂がもたらされましたが、いずれも結果として現在民主化と経済発展にいたったという事実は、大変興味深い点であります。

第2セッションにおいては、「朝鮮戦争と社会主義圏」について中国の張先生、ロシアのミキーエフ先生から報告がありました。

張先生から「朝鮮戦争と中国 - 戦略、国防及び核開発への影響 - 」と題して、朝鮮戦争が中国の戦略の方向性や、軍の近代化、あるいは、核兵器の開発に大きく影響した様子についてお話をいただき、中国が朝鮮戦争から受けた影響が広範で、長期に及ぶものであったことが明らかにされました。中華人民共和国の誕生(1949年)以降、中国は国内社会の再建を戦略目標としましたが、朝鮮戦争への義勇軍の参戦によって、中国は資源(人的、その他)を朝鮮半島に向けることになったため、国内の経済復興等は遅れました。同時に、中国の外国政策も変更され、アメリカが想定敵国 No. 1 となる一方で、中ソ関係が強化され、朝鮮半島に再び関与することになりました。軍の近代化については、朝鮮戦争は空軍の創設の重要な動機付けとなったことが指摘されました。最後に、朝鮮戦争中にアメリカが核兵器の使用を示唆したこと等が、中国に原子爆弾の開発へと踏み切らせた過程が説明されました。

ミキーエフ先生から「朝鮮戦争とロシア - 朝鮮半島政策への影響 - 」と題して、スターリンの理論「国防の3つの輪」を通して見た朝鮮戦争と、その後のロシアの国防ドク

トリンに与えた影響についてお話をいただきました。第二次世界大戦後、スターリンは国防の3つ目の「輪」を設置し、「恒久的な緊張状態」をソ連の国境沿いに構築することにより、それがトリガーとなってソ連の安全保障が促進されることを企図いたしました。北朝鮮にもその役割が期待されましたが、スターリンは朝鮮戦争の早期の解決を望まず、スターリンの死後、ソ連は「平和的共存」に転向し、北朝鮮は「3つの輪」における役割を失ったのであります。

第2セッションは、中国、ロシアからの発表であり、私どもも非常に興味のあるものでした。朝鮮戦争における、スターリン、毛沢東、そして金日正の関係が考えられていた以上に複雑なものであることもわかりました。さらなる史料公開が期待されるところです。

第3セッションにおいては、「朝鮮戦争と欧米諸国」についてアメリカのミレット先生、イギリスのホブキンス先生から報告がありました。

ミレット先生から「朝鮮戦争とアメリカ - 戦争と内政 - 」と題して、当時政治改革を迎えていた米国にとって朝鮮戦争の勃発がどのような影響をもたらしたのかについてお話をいただきました。国内政治情勢への影響は限られ、経済への影響も微少であり、文化への影響も限定されたものでありましたが、一方で、アメリカの安全保障政策への影響は重大であったと指摘されました。すなわち、国防予算の上限についての大統領と連邦議会との間の「連合」が破壊されたのをはじめ、議会は軍備拡張にも寛容になっていったのです。さらに、戦争を契機に、捕虜となったアメリカ兵、アメリカ軍内の人種差別の問題、現役兵力と予備兵力の比重における問題点に焦点が当てられ、解決が試みられたと言及されました。

ホブキンス先生から「朝鮮戦争とイギリス - 英米関係へのインパクト - 」と題して、イギリスが如何に朝鮮戦争に巻き込まれていったのかについてお話をいただきました。イギリスは当時、東アジアにおいては香港、マラヤ等に権益がわずかながらありましたが、韓国において経済的利益はなく、韓国を戦略的に重要と考えていませんでした。にもかかわらず、アメリカのリードに従い、戦争勃発後間もなく参戦するにいたりますが、中国認識と航空作戦の進め方をはじめとする様々な側面で、アメリカと見解を異にしていました。他方、朝鮮戦争への参戦の結果、イギリスは冷戦の枠内での国際的地位を高め、英米関係も強化されましたが、英米の比重の偏りは変わることがなかったと結ばれました。

第3セッションは、韓国を除く国連側の参戦国で、最大規模で関与した2国家に対する朝鮮戦争の影響を取り上げました。アメリカへの影響についての報告は主に国内への影響に焦点をあて、イギリスについての報告はイギリスの国際関係に焦点をあてたものでした。朝鮮戦争の結果、アメリカは恒常的な軍事大国への道を歩み始め、イギリスは

東アジアには権益がなく、関心も低く、地理的に遠い地域で戦われた戦争であったにもかかわらず、様々な長期的な影響を受けたことが明らかにされました。朝鮮戦争は限定的な戦争ととらえられがちですが、その影響は実は広範、かつ長期に及ぶものであったことが、この2つの報告からも明らかにされたと思います。

セッション毎に、葛原、安田、小谷の3先生からコメントをいただき、議論をさらに充実させることができました。最後に、朝鮮戦争の「遺産」といった視点から、本フォーラムの総括を述べたいと思います。

第一に、米中ソという周辺大国への「遺産」です。朝鮮半島は、その地政学的重要性から、歴史的に周辺の大國による介入が繰り返されました。古くは、白村江の戦いから、新しいところでは、日清・日露戦争などです。しかし、朝鮮戦争に際しては、第二次世界大戦終結、中国建国の直後ということもあり、アメリカが共産主義拡大への危機感を有した程度で、米中ソ共にほとんど無関心でした。

その後、いずれの国も、朝鮮戦争に参加することにより、軍事大国への道を歩むことになり、周辺大国にとっては、意図しない形で安全保障・外交上の「遺産」を残すことになります。特にアメリカは、英米の力関係は既に第二次世界大戦によって逆転していましたが、朝鮮戦争を契機として戦後世界の超大国へと発展していくことになります。また、これまで、アメリカの伝統的な対東アジア政策は、軍を介入しない方針でしたが、朝鮮戦争を契機に深くコミットしていくことになり、それは、画期的なことでした。その結果、中ソとの対立は決定的になり、ベトナム戦争を経て、冷戦が深まっていくことになりました。特に、中国は核開発、空軍をはじめ軍の近代化に着手し、米中対立の原型が生まれました、他方、周辺の大國にとって、国内的な影響は、限られたものに過ぎませんでした。

第二に、当事者である韓国と、日本という東アジアの国に対しては、国内的に大きな「遺産」が生じました。すなわち、韓国では、権威主義体制の強化と、社会の平準化・再統合がもたらされ、日本は、「国内冷戦」のもと、激しいイデオロギー対立を生むことになりました。

他方、朝鮮戦争は、両国にとって、戦後の経済発展の基礎をもたらし、時期的相違はあるものの、その後高度成長を遂げ、現在では両国とも経済大国としての地位を得ています。

第三に、同盟関係への「遺産」です。世界的には、米英、中ソの同盟関係が強化されましたが、東アジアにおいても、日米、米韓対中朝、ソ朝といった自由主義陣営と社会主義陣営の同盟の対立の構図が形成されました。

しかし、北朝鮮とソ連及び中国との同盟関係は、想像以上に微妙なもので、北朝鮮の両国に対する不信感は、社会主義諸国のなかではユニークな独自の「チュチェ思想」を

生む背景になったと思われます。

このように、朝鮮戦争は、いずれの関係国にとっても、質は異なるもののそれぞれに多大な影響を及ぼすとともに、その「遺産」は、東アジアはもちろん広く世界にまで及んでいると言えます。その意味において、現在の朝鮮半島の不安定な情勢を検討する上で、朝鮮戦争は大きな示唆を提供していると言っても過言ではありません。

